
蝉時雨

NAO

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝉時雨

【Nコード】

N6600A

【作者名】

NAO

【あらすじ】

それは夏真っ盛りの炎天下。 蝉時雨の中で、私は叶わない恋をした

（前書き）

共同企画小説参加作品。テーマは「雨」です。企画に参加してくださった先生方の作品は、雨小説、で検索していただくと、ご覧になれると思います。よろしくお願いします。

私の足元に、ボールが転がってくる。

私はそれを足の腹でコントロールすると、ゴール前に走りこもうとする彼に視線をくれる。彼は、ゴール前に猛スピードで飛び込んできた。顔を上げて彼を確認する。足元のボールがゴールラインギリギリまで接近したところで、私は大きく足を振り上げた。

大きなバックスイング。

短いスカートが揺れ、私の髪が舞い上がる。風を切る音が耳の中をかき混ぜた。私が出せる最高のスピードで、右サイドラインを駆け上がり、そのままの勢いで彼にクロスボールを供給する。

ボールを受け取ったとき、一度だけ彼を見た。確認は、それだけで十分。一度見れば、彼がどんなボールを要求しているのか、どんな動きをするのか手が取るように分かる。

私は振り上げた足を、ボールに叩きつけた。

ボールを擦り上げるようにして回転を加え、ゴールから離れていく軌道をイメージ。はやるイメージに遅れて、私の体が寸分の狂いなくイメージをトレースする。

きちんとボールをとらえれば、右足には何の衝撃も走らない。突き抜けるような爽快感が、クロスボールを上げた私の体を駆け抜けた。ボールは独楽のように美しい横回転をもって、彼に合流すべく綺麗な曲線を描く。ぐんぐんと曲がるそれは、やがて高く舞い上がる彼の胸に収まり、彼は体を無理に回転させた。バランスを崩した体勢のまま、彼は左足で地面に着地し、落ちてくるボールを右足で正確にとらえる。

彼の強烈なボレーシュートが、ゴールネットに突き刺さった。

その衝撃音に、蝉時雨がぴたりと止んだ。まるでアウエーの地でゴール決め、観客を黙らせたときのよう。

ネットを突き破らんばかりに飛び込んだボールが、反動でゴール

から抜け出てきた。彼はそれを器用につま先で浮かすと、そのボールを浮かせたまま、私に蹴ってよこす。

「もう一本頼む」

私は学校の制服が汚れるのも構わずに胸でトラップし、足の裏でボールを止める。

「いいよ。その代わり、後で飲み物くらいおごってよ?」

「了解」

彼は汗をユニフォームの袖で拭くと、ゴール前から遠ざかっていく。汗を吸い込んだ髪の毛が、まるでワックスで固めた髪の毛のように見えた。その毛先を伝って落ちた汗の雫は、太陽に反射してきらめき、地面の砂に吸い込まれる。

にわか雨にふられたように濡れた彼のユニフォーム。彼のたくましい胸板に張り付いているから、筋肉のラインがはつきりと見え、それが私をドキドキさせる。筋骨隆々というわけではないけれど、引き締まっただけで無駄がない。

「美樹、今度は低くて速いやツな。ニアサイドに頼む」

彼が手をあげて私に指示を出す。

「いいけど、さっきの何よ。ゴール前であんなに簡単にトラップできるわけじゃない。コースは完璧だったんだから、ダイレクトでヘディングすべきところでしょ?」

彼は走り出そうとするのを止めて、腰に手を当てる。

「あまりにいいコースにボールが来るからさ、つい」

「練習なんだから、もっとまじめにやってよ……」

彼は頬を膨らます私に苦笑いをしているが、次の瞬間には顔を引き締める。

「次は本気。真面目にやる。それでラスト」

「……分かった」

私は渋々うなづいて、走り始めた彼にボールを蹴りだす。彼は、まるで手品のようにボールを軽々とトラップして見せ、並走する私にロングボールを上げる。ボールが太陽と重なって、やがてそれは

私の数メートル先に舞い降りる。

ロングボールが私に向かってくる様子は、本当に時が止まったかのように。蝉のけたたましい鳴き声や、ボールが弾む音、風を切って走る音、地面を蹴る音が、全て消えてなくなる。

真空。

私と彼は、グラウンドという名の宇宙にいる。

まさに無音の境地。

そこには二人だけが共有できる空間が広がり、二人だけが心を通わせることができる。繰り返されるパス交換は、そんな二人の会話そのもの。お互いを思いやり、お互いを支えあい、お互いを引き出しあう。私にはそれが分かる。彼は、私が追いつきやすいようにボールに逆回転を加えてくれ、その心遣いを感じるたびに、私も彼に最高のボールを渡したくなる。短いスカートが翻るのも気にせず、私は最高速度で駆け抜ける。シャツが気持ち悪いくらい体に張り付いて、下着の色が見えてしまっても、早起きして丁寧にセットした髪の毛が乱れても、化粧が落ちてしまっても、私は構わない。彼の出したボールをしっかりと受け取ることさえできれば、それは瑣末事になる。

だから私はがむしゃらに彼のボールを追いかける。

腕を振って、足を伸ばす。

もう少し、もう少しで追いつける。

「美樹！ 悪い！」

彼の大声は、ボールを受け取ることでできなかった私に向けられた。あと数センチで届くはずだった。

「大丈夫か？」

彼が転んだ私に駆け寄ってくる。左足が擦りむいていて、血がにじんでいた。汗を吸い込んだ純白のシャツ。その白に付着した砂埃は、まるで餅に付いた黄な粉。

「ごめん、追いつけなかった……」

「いや、あれは俺のせいだ。美樹がそんな顔する必要ない」

差し伸べられた手を取ると、彼の太い腕が、軽々と私を持ち上げる。私は擦りむいた足の痛みも忘れて、顔が茹で上がってしまう。私は眼前に迫る彼の胸に飛び込んで、甘えたくなる衝動を抑えるのがやっと。

彼はそんな私を心配してくれて、手を引いて水飲み場まで連れて行ってくれた。

「ごめんな、俺が調子に乗ったばかりに」

「気にしないでよ。私だって、サッカーやっている以上、怪我を忘れていたわけではないから」

水道の蛇口をひねると、宝石のように輝く透明な水道水が、私の左足をなめていく。膝をなぞり、つま先へ。ほてった私の体を足元から冷やしていく。

さっきまで全速力で走り回っていたとは思えないくらい、静寂な空間が水飲み場に出来上がる。

蝉の鳴き声が遠ざかっていった。

「勇二はさ……」

傷口を水道水で洗浄する私の隣で、彼が水道水を頭からかぶっている。隣の蛇口を目いっぱい開いて、後頭部から水を浴びるその姿は、砂漠に見つけたオアシスに飛び込んでいくよう。勇二は、好き放題水を浴びた後、前髪から水滴をたらしたまま、口いっぱい水を飲み込んでいく。喉仏を元氣よく上下させながら飲み込んでいく様に、私はまた体温が上昇していくのを感じた。太陽に焼けた健康的な肌、特に首元に釘付けになってしまった。

ふと、彼の首筋の味を知りたくなった。

「ん？　なんだ？」

私は自分から問いかけていたことを忘れて、体を震わせた。勘付かれたかな、と思い首をすくめる。彼はそんな私の痴態に微笑む。

「美樹が男だったら良かったのにな」

彼は水道水で濡れた口元を拭って、私に笑いかけた。

「そうしたら、絶対にいいサイドハーフになれる。俺だって、もっ

ともつと得点できる気がする」

私は針に刺されたような痛みに耐えながら、彼の胸を小突く。引き締まった彼の胸の感触が、小突いた手から伝わってきた。

「嘘じゃないぞ。県内でも……いや、全国でも、あんなに完璧なボールを蹴れる人間はいない。俺が保障する」

「ありがと。自慢にするわ」

彼は私が信じていないと思っているようで、少しむきになって私の手をつかむ。

「本当だつて。美樹のボールじゃないとしつくり来ないんだ。それに……俺の動きを肌で感じて出してくれるやつなんて、他にはいないだから、これからも練習に付き合っただけいいんだ」

彼の感情が、つかまれた私の手から流入してくる。温かくて、それでいてたくましくて、一途で……。

「あのね、私、女なんだ。だから、いつまでも勇二のそばでボールを蹴ってられないの」

勇二が私を最高の練習相手として見てくれているのは分かる。

素直に嬉しい。

でも、私が勇二の動きを感じてパスを出せるのは、勇二を知ろうという強い思いが故。パスのタイミングだつて、角度だつて、高さだつて、回転だつてそう。全て勇二を知ろうとして、努力した結果に得られたもの。分かりたい、分かり合いたい、分かって欲しい。その積み重ねが、今の私の全て。

ボールの放物線が、きちんと勇二に届いて欲しい。

私の想いの放物線が、きちんと勇二に届いて欲しい。

それだけなんだよ。

「私だつて人並みの女の子なんだから、おしゃれして、友達と遊んで、恋愛もしたいの。だから、いつまでもサッカー馬鹿に付き合っていないの、分かった？」

それでも私はこの想いを打ち明けることができない。私のパスはあんなに素直に勇二に届くのに、私の思いはちつとも勇二に届かな

い。勇二は私のパスを感じて、あれだけ上手に受け取ってくれるのに、想いはちつとも感じてくれない。

「だから、今だけ付き合っただけあげる」

身勝手な私。不器用な私。

「……悪かったよ。でも、ありがとな」

「別に、私サッカー好きだし」

勇二が好きだから、サッカーが好きだと言っただけだった。でも、勇二は私が好きだからサッカーが好きなのではない。もちろん、サッカーが好きだからといって、私が好きだという保証もない。恋愛に保証はないから。

「美樹が男で、俺と同じサッカー部だったら……きっと最高のパートナーだな」

蛇口の水を止めて、傷口に絆創膏を貼る私を見下ろしながら、勇二は青空を仰ぐ。

一陣の風が駆け抜けると、グラウンドの周囲に生えた木々と、私の心がざわめく。

「……馬鹿」

リフティングを始めた勇二のボールをカットして、私はドリブルを開始する。絶対に彼にボールは取らせない。私は一定のリズムでボールにタッチしながらスピードに乗った。

「美樹！ 見えてるぞ！」

勇二が片手でメガホンを作りながら、私の後ろを走ってくる。

「見えてるんじゃないの！ 見せてるの！」

「ば、馬鹿……！」

勇二の日に焼けた褐色の肌が、真っ赤に染まるのが見えた。

私はドリブルしたままグラウンドに入る。勇二はそんな私を、俊足を飛ばして追い抜くと、ペナルティエリア前で立ちふさがった。私は一度ボールを止めて、彼と対峙する。勇二は少し体勢を低くして、私の動向をうかがう。

右、それとも左。

私は右足でボールをまたいでフェイントを入れる。勇二の体重が左足にかかるのが理解できた。極端な体重移動は、絶対的な隙といえる。私はわずかに開いた股の間を見逃さなかった。ボールを勇二の股の間に通して、私自身も勇二の横を駆け抜ける。

「……っ、くそ！」

股を抜かれる屈辱を味わっているのだろう。勇二が舌打ちをする音が聞こえた。

今のは、私の純粋な気持ちに気がつかない罰。

私は思わずほころんでしまう。

ゴール前は無人。二人だけの練習だから、それは当たり前。だから私はある賭けをすることにした。

シュートが決まれば私は勇二に告白する。

シュートが外れれば、勇二のことはあきらめる。

勇二はすぐに私に追いついて、体重をかけてくる。女だからって容赦はしていない。これは一対一、女も男も関係のない勝負。私は体勢を乱しながらも、大きなバックスイングをとる。

最高の力で、最高のシュートを。

蝉時雨の午後、思いの丈をボールに込めて。

私はシュートを放った。

【END】

（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方ありがとうございます。
ます。ここまで読んでくださった方は、ある疑問が浮かぶと思います。
す。テーマが「雨」にもかかわらず、雨が出てこない！！…申し
訳ありません。蝉時雨という言葉で誤魔化しました。そんな作者で
すが、これからもよろしく願います。評価、感想、栄養になります。
ます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6600a/>

蝉時雨

2010年10月8日15時37分発行